

「消化管内圧測定法」

監修 東北大学教授 葛西 森 夫

編集 九州大学教授 池田 恵 一

慶応義塾大学助教授 勝俣 慶 三

兵庫医科大学教授 岡本 英 三

三重大大学教授 鈴木 宏 志

神奈川県立こども医療センター病院長

角田 昭 夫

小児外科のいわば同好仲間から必然的に誕生した“直腸肛門内圧研究会”が、その後食道内圧を含める“小児消化管内圧研究会”に発展し今回で第13回を数えている。当研究会の集大成が本書であり、研究の中心的存在であった葛西森夫教授が監修されている。

序論に消化管内圧測定の、歴史的変遷が示されており、興味をそそる。それによれば研究会とは逆に、まず発達したのは食道内圧研究のほうだったらしく、この理由としてはやはり、食道裂孔ヘルニア、逆流性食道炎が、特に白人に多い点が挙げられよう。一方、Hirschsprung病の本態が拡張腸管ではなく、肛門側狭小部にあることがわかったのが1950年ごろであり、更に本症における直腸括約筋反応欠如が発見されるに及んで、こちらのほうの研究も急速に発展したもようである。前に食道内圧の研究が先行したと述べた

が、当初は primitive なもので、測定器具の開発などの関係から、その研究が進んだのは最近であるという。つまり測定しやすいための好条件を備えた部位である、消化管の入口と出口の内圧測定は並行して進められ、共に急速に発展したのが1960年代後半ごろだったらしい。

序文の最後にいみじくも述べられているが、直腸肛門内圧測定が成人外科における肛門機能温存手術に最近ようやく応用されているという。小児外科が成人外科に先行している事実、関係者の1人として誇らしく思える。

内容の紹介に移ろう。まず測定器具、次いで測定方法およびその正常値が、総論の中に示される。食道と直腸肛門とはもちろん別項の記載になっているが、前者の中に食道内pH測定が1項として設けられている。胃食道逆流現象(GER)を研究する際、内圧や内視鏡と共に不可欠

の検査法であるからであり、食道内pH測定に関しては筆者の施設で、先行的に行っていた関係もあって興味があった。現在GERは小児外科学会においても1つのトピックであり、乳児GERが成人のそれと病因、病態が異なるだけに、診断への総合判定や、手術適応基準の確立が望まれるところである。今後の研究目標であろう。

各論の中でHirschsprung病は当然のことながら、スペースも多く割かれ、病因論から組織、診断、治療法まで示されている。Acetylcholinesterase染色は本書唯一のカラーページで示されている。直腸肛門反射欠如を、H病確定診断基準の1つとすることは、現在小児外科学会では常識であるが、本書ではこの点を十二分に解説して余すところはない。しかし人工肛門造設後の反射の出現、false positive例、manometric studyの術後排便機能への応用など、未解決の部分も大いに残されているようである。

最後に、本書を執筆されたのは26人であるが、そのほとんどが大学人(あるいは大学における研究)であり、小児病院からの業績が少ないのに気づいた。臨床は小児病院、基礎的研究は大学の小児外科教室という分業の現れであろうが、当事者として多少気になるところではある。

B5判 232頁 図177 写真55
原色図4 1983年 7,000円 送料300円

医学書院 刊